

図書館司書のための歴史史料探索ガイド

土屋 直之

(山形大学小白川図書館)

1. 木々に囲まれた山城

2009年、大河ドラマ『天地人』の舞台となったわが地元・山形県ではさまざまなイベントが開催され、「大河効果」で大いに盛り上がった。ドラマそのものも、細部に不満がないわけではないが、なかなか面白かった。

しかし、ドラマはあくまでもフィクション。見ていると首をかしげたくなくなる所々でてくる。一例を挙げてみよう。

上杉氏の家臣・直江兼続の話なので、その本拠地・春日山城が登場する。おりしも上杉謙信が病に倒れ、後継ぎと目されていた二人の養子・景勝、景虎が主導権を巡ってあい争う「御館（おたて）の乱」の回である。二人の間に緊張が高まり、春日山城は戦場になろうとしていた。見ていると、ドラマの中の春日山城は鬱蒼とした木々に囲まれて、その中に建物が点在するようなロケーションとして描かれている。私はふと不思議に思った。

「戦場になる場所なのに木が鬱蒼としていたら、焼き討ちに遭うし、敵の隠れ場所に使われてしまうのではなかろうか？」

はたして、NHKのウェブサイトを見たところ、実際の戦国の城を再現したわけではなく、上杉氏の「義」を守りぬいたイメージから木々に囲まれたデザインにしたのだという。

では、実際のところはどうかだったのだろうか。小和田哲男著『戦国の城』を読んで、戦国の城が「土の城」だったということは知っていたが、同書には当時立木を伐採したとハッキリとは書かれていなかった。この疑問をどうにか解決したいと思っていたところ、さあべい同人会（山形県の考古学専門家による研究会）の保角里志氏の労作『南出羽の城』の中に以下の記述をみつけた。

ところで、調査のなかで考えたのは、「山城は裸」ということであった。というのは、土塁の内側や曲輪からの敵にたいする攻撃には前方の木はじゃまになるし、敵のかっこうの隠れ場にもなってしまう。（中略）そうすると、当時の山城は曲輪の外は樹木を切り払った姿であったと考えられるのである。そして、曲輪のまわりには塀や柵木、土塁の上には柵木で嚴重に防備されていたのであろう。（同書93ページ）

このまさにわが意を得たり、という記述を見つけて、何となくホットしたのであった。

また、同じくドラマの中で「手取川の戦い」がでてきた。劇中では上杉軍が織田信長軍をさんざんにやっつけたように描いていた。しかし、そんなに勝ったのなら、なぜ上杉氏は上洛して天下を得ようとしなかったのだろうか。ドラマの中では謙信が「義」を重んじたため、としていたがそれは本当だろうか……？（手取川の戦いについては本誌49号に少しふれたので参照していただければと思います）

……以上はドラマの感想（ツッコミ？）なので、このような例が典型とは言わないが、大学図書館には日々歴史に関するレファレンス質問が持ち込まれてくる。また、歴史学を専攻する教員や学生をサポートする役目もある。このようなとき、私が苦労したのが史料をいかに探すかということであった。そのため、自分の覚え書きとして探し方ガイドを作り始めた。

今回、同業の方がたへの参考となればいいと思い、やや体裁を整えて、それを公開してみたことにした。

なお、歴史学研究者・学習者をサポートする図書館司書向けに作ったが、歴史学を学ぶ学生が読んでも役に立つようにしたつもりである。ただし、本稿は史料を「いかに探すか」ということのみで、「史料からどのようにして、何を読みとるか」という肝心のところは触れていない。そこはあくまで研究者の領域である。指導教員に相談したり、参考文献に挙げた図書を読んだりして自ら検討してほしい。(本稿作成のねらいと動機について、詳しくは本稿の末尾に記しました)

2. 歴史史料について

歴史学は人類の歴史を研究対象とする学問である。そのため、研究に当たっては、自分と同じテーマの先攻研究を参照することはもちろん重要だが、それ以上に重要なのが、「史料」——すなわち過去の人々が残した古文書などの資料——を参照することである。

一般に史料と言った場合には、歴史研究の際に参考にされるもの全てを指し、文献資料以外にも考古資料(遺構、遺物など)や絵画、絵図などをも含むが、ここではもっとも多く参照され、かつ図書館司書として取り扱うことの多い文献資料(文献史料)に限って説明することにする。

史料は大まかに一次史料と二次史料に分けられる。一次史料とは、対象とする時代当時に記された史料のことである。二次史料とは、一次史料を参考にして後代に編纂・記述された史料のことである。

研究に際しては、一般に二次史料より一次史料の方を重視する。これは、二次史料は編纂者の目的や価値観を反映したものにならざるをえないからであり、また、編纂にあたり一次史料の取捨選択が行われていることがあるからである。

ただ、ここで少しややこしい問題がある。

例えば織田信長研究の際にかかせない史料として必ず言及されるものに太田牛一の『信長公記』がある。豊臣秀吉の命により、牛一の日記や、関係者への聞き取り、さらには当時現存していた文書などを参照して、織田信長の死後(江戸時代初期)に成立したとされており、一種の編纂物には違いない。時代もほぼ同時代とは言え、信長の活動当時にそのままを著述した日記のようなものではない。すなわちカテゴリーから言えば二次史料に相当するのだが、この『公記』でしか伝わらない史実を多く含み、他の史料との比較検討からしても、ほぼ史実を正確に記録していると評価されている。

一方、ほぼ同じころ成立した小瀬甫庵の『信長記』(『甫庵信長記』)は『信長公記』にフィクションを付けくわえてリライトしたもので、かつては『甫庵信長記』の記述が史実としてまかりとおった時代もあったが、現在では歴史小説の類とみなされている。

このように、二次史料と言っても一次史料と同等の一次史料と判定されることもあり、また逆にフィクションと判定されることもある。この判定はひとえにその史料がどのような状況で成立したか、という側面と、記述内容が他の史料と比較して真正かどうかという側面で検討しなければならないのであって、歴史研究にはこの「史料批判」が欠かせないのである。

利用者(特に学生やアマチュア研究者など)に史料を紹介しなければならない司書は、『信長公記』と『甫庵信長記』を同列に扱って、両者を並列して利用者に提示したりすることは避けなければならない。つまりは、現在定説になっている史料の価値判定はそれなりに頭に入れておいたほうがいいということである。もっとも、研究者レベルで現在の価値判定を学

術的に検討したりすることまでは求められてはいない。要は一般向けの著作からでも得られる情報を、きちんと頭の中に入れておけばいいということだ。

3. 史料集について

一次史料とは、研究対象となる時代に、当事者（伝聞者も含む）によって作成された文献史料のことで、具体的には古文書（公文書や書状、商業文書、寺社文書など）や古記録（日記）などを指す。さて、いざこれらを参照したいと思ったら、その古文書等を所蔵する施設（公文書館・博物館・図書館あるいは個人宅等）を訪ねなければならないのだろうか。

答えはイエスでありノーでもある。

史料の伝存と翻刻刊行

時代区分\状況	伝存史料数	翻刻刊行
古代	少ない	すべて完了
中世	多い	おおむね完了
近世	とても多い	ごく一部のみ完了

現在では数多くの一次史料が、活字化（翻刻）され、公刊されている。一次史料を収めた書籍を史料集という。図書館は『大日本史料』を初めとする多くの史料集を所蔵しており、近年その刊行内容はどんどん充実してきている。歴史研究者にとっては、非常に便利になってきている反面、初学者がこれらを使いこなすには、司書の援助が不可欠である。そのため、それらの使い方を説明するのが本稿の目的のひとつである。

その前に、活字化されていない史料について触れておく。史料の翻刻刊行の状況は、上の表のようになっている。時代が近くなるにつれて現存する史料が多くなっているのは、時代が遡るほど諸勢力の興亡のうちに失われてしまったものが多いことや、当時においては和紙が貴重だったため、現存する絶対数が少ないことによる。一方近世（江戸時代）以後については、現存数が膨大であり、支配層だけでなく商人や豪農層も文書を残すようになるため、翻刻されているものは全体の一部に限られる。

このように未刊行のものは、所蔵施設を直接訪ねて閲覧しなければならないわけである。

一次史料の種類

古記録（日記）

古文書

公文書（古代～近世）……「綸旨」等律令制での公式文書

武家文書（中世～近世）

寺社文書（古代～近世）

商人文書（近世）

地方（じかた）文書（近世）……豪農や村役人など

※詳しくは佐藤進一『古文書学入門』などを参照。

4. 二次史料について

二次史料は一次史料を元に編纂記述されたものであり、その典型かつ最高権威として「正史」がある。

正史は司馬遷の『史記』を嚆矢とする。司馬遷以前においても歴史的記述がなかったわけではない。例えば『春秋左氏伝』は春秋時代の歴史的事実を述べたものだという。しかし、司馬遷以前の歴史記述はあくまでも教訓を導き出すために、古い時代の賢王の事績をまとめた訓話としてのそれだった。司馬遷において初めて体系的で史実に忠実な歴史叙述というのが生まれた。

中華帝国の文化圏下では経書（儒教経典）を頂点とし、より古いものがより尊いとされる——漢籍の四部分類法はその考え方を受け継いでいる。そのような価値観の下で、「正史」は高く評価され、以後、中華帝国の各王朝は前代の王朝の「正史」を編纂することを国家事業とするようになった。このようにして編纂された歴代王朝の「正史」が『史記』を初めとする「二十四史」である。

中華帝国の影響を大きく受けた我が国においても歴史書の編纂は国家事業と位置づけられ、『日本書紀』を初めとする「六国史」が編纂された。

正史一覧

「二十四史」

史記 漢書 後漢書 三国志 晋書 宋書 南齊書 梁書 陳書 魏書 北齊書 周書 隋書 南史 北史 旧唐書 新唐書 旧五代史 新五代史 宋史 遼史 金史 元史 明史

「六国史」

日本書紀 続日本紀 日本後紀 続日本後紀 日本文徳天皇実録 日本三代実録

しかし、王朝が革命によって交代するという「易姓革命」思想は輸入されなかった。それゆえに、我が国においては、政権が朝廷から他者へ移るとともに正史編纂事業は頓挫した。

これが復活したのは、ずいぶん時代がくたって、明治維新後になってからである。明治2年、明治新政府は、『群書類従』編纂者として有名な埴保己一の建言によって設立された幕府の機関・学講談所の跡地に「史料編集国史校正局」を開設した。この機関は名称を変遷しつつ現在の東大史料編纂所へと受け継がれてゆく。当初、新政府は往古のように「正史」を編纂することを検討していた。しかし、外国人教師ルードウィヒ・リースの助言を容れて、歴史書ではなく史料集を刊行することになったという。

このように、東大史料編纂所における『大日本史料』およびそれに続く一連の史料集の刊行は、我が国における「正史」編纂事業を引き継ぐ、大規模かつ公的な国家事業なのである。「正史」といえども、歴史書である限り、編纂者の歴史観からくるバイアス（偏り）を免れない。正史編纂に代わるものとして史料集刊行を選択した我が国政府は真に先見の明があったと言えるだろう。（「正史」によるバイアスについて詳述する紙数はないですが、興味があるかたは【66】をご一読ください。）

では、「正史」以外の二次史料について見てみよう。「正史」である六国史は古代の段階で終わっているのだから、それ以降の歴史を研究する際には、別の二次史料が欠かせない。具体的には『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』の所謂四鏡、鎌倉幕府の公式歴史書である『吾妻鏡』、

主な二次史料（歴史書）の例

四鏡『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』

……平安時代後期から室町時代前期までに成立した4つの歴史書

『吾妻鏡』……鎌倉幕府の公式歴史書

『神皇正統記』……南北朝時代に北畠親房が記した歴史書

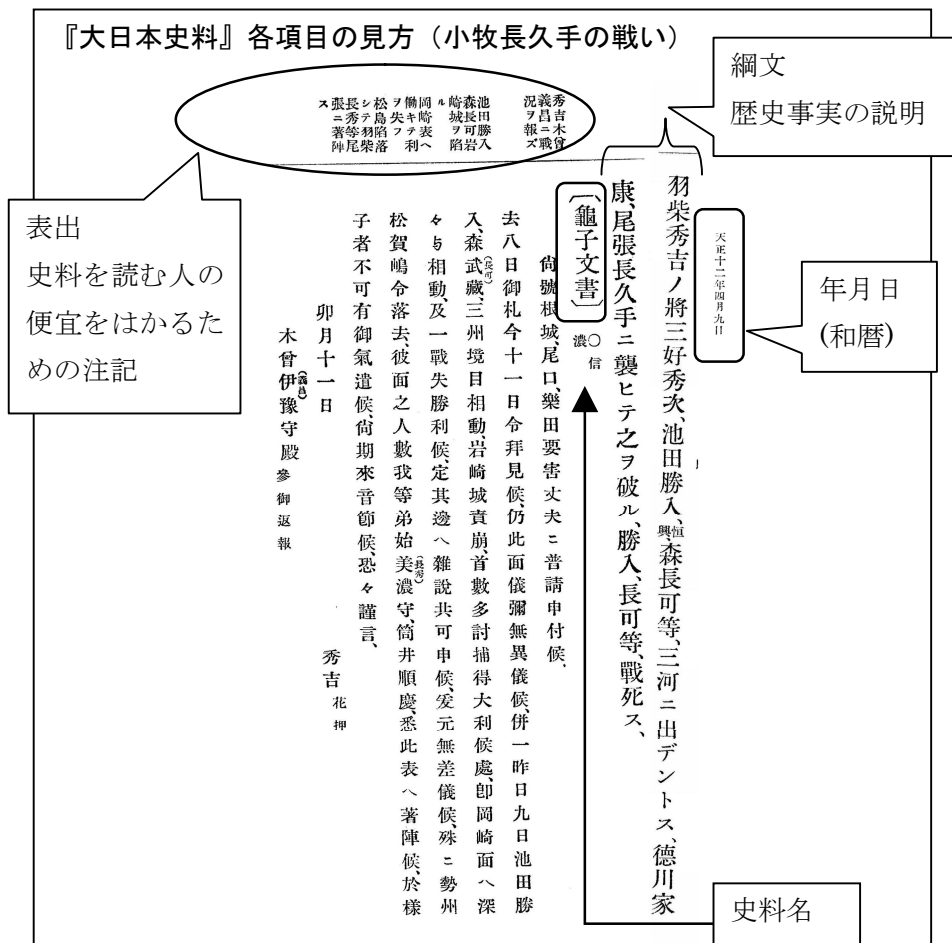
『信長公記』……織田信長の家臣・太田牛一が記した信長の一代記

『徳川実紀』……江戸幕府の公式歴史書

『上杉家御年譜』……上杉謙信以降幕末までの米沢藩の公式歴史書

北畠親房『神皇正統記』、徳川幕府の公式歴史書『徳川実紀』等である。

また、これらある程度公的な目的をもって編纂されたものの他にも、先述した『信長公記』のように信憑性が高く、その時代の研究に不可欠な二次史料も多くあるので留意が必要である。



5. 史料集ガイド

ここでは、具体的な史料集およびそれを探すための工具書（レファレンスブック）、インターネットサイトを紹介していく。各叢書・史料集の各巻ごとの収録史料名は、いちいち挙げておけば便利だとは思ふものの、紙幅を取り過ぎるので、工具書から簡易に調べられるものについては割愛し、残りのうちおもなものだけを掲げた。

工具書は、史料を探すために直接利用するもののみを掲げ、『国史大辞典』、『読史備要』などに代表される工具書は割愛した。

なお、史料集を便利に使うためのガイドという性格上、書名のみ掲げ編者その他の書誌事項を割愛させていただいた。現在我々が多くの史料集を利用できるのは、六国史の編者や国学者・塙保己一に始まり、現代の一流の研究者にいたるまで多くの先人の途方もない知恵と労力をそそいだ営為の積み重ねによることは、改めて銘記しておきたい。

【1】『大日本史料』刊行中

【2】『史料綜覧』全17巻

【3】東京大学史料編纂所 SHIPS for INTERNET

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>

【1】は先述したように我が国において「正史」編纂を引き継いだ公的な史料集で、最も大規模で網羅的なもの。図書館の書架一列を占領してしまうほどの分量があり、いまなお刊行中である。個人で所有することは難しいため、図書館司書が取り扱いかたを知っておくべき資料の典型と言える。基本的には一次史料を優先して収めるが、二次史料も重要性に応じて収めている。

①編年体になっていること、②時代ごとに各部編に分かれていること、③史料を裸で載せているのではなく、綱文を付していること、が特長である。

編年体は出来事の起きた順に記述する形式で、出来事ごとに綱文を立てて一項目とする。項目内に関連する史料を引用し、それが複数ある場合、同じ項目内では重要性や信頼性の順に配列している。その項目に関連する部分のみを引用しているので、古文書のような短いものであれば全体を引用するが、歴史書などの長いものは一部のみ切り取って引用している。これはその項目（史実）について検討したい場合には便利であるが、特定の書目の歴史書を通読したいというような用途の場合には不便である。そのため、そういった場合には、後述するような歴史書を書目ごとに収録している史料集を当たる方がよい。

次いで綱文について。綱文とはいつ誰が何をしたという5W1Hを簡潔に述べたもの。この綱文と引用史料名が【1】の根幹をなすと言っても過言ではない。この綱文を作る作業は簡単なようで、実は高度な歴史考証をおこなっている。実際の綱文作成過程の様子は【68】で参照できる。なお、綱文はカタカナ混じりの文語体で記述されるが、これは明治期から編纂が続く【1】が途中で表記を変えるのを避けるためである。

実際の例として、前ページに綱文から史料本文までを含めた【1】の1項目のセットを掲げた。

次いで部編分けについて。【1】は以下のように各部編の収録年代を区切っている。基本的には古代から江戸時代の終わりまでを収録する計画だが、現在刊行されているのは江戸時代初期までを収録する第12編までで、それ以降の部編については史料の収集・整理などの基礎作業を行っているものの、刊行については未定だという。これは江戸期には膨大な一次史料が残されているため、中世までについては現存する史料を悉皆的に収録しているが、近世以降についてはそうもできず、重要な史料を取捨選択して載せることになるのかもしれない。いずれにしても、近世部分の刊行はさうとう未来のことになりそうであり、近世史を研究する人は、【1】に頼らず自分で史料を集めることを求められるのである。

『大日本史料』の編分け

第1編	仁和3年～寛和2年 (887～986)	※完結済
第2編	寛和2年～応徳3年 (986～1086)	
第3編	応徳3年～文治元年 (1086～1185)	
第4編	文治元年～承久3年 (1185～1221)	※完結済
第5編	承久3年～正慶2年 (1221～1333)	
第6編	元弘3年～明德3年 (1333～1392)	
第7編	明德3年～文正元年 (1392～1466)	
第8編	応仁元年～永正5年 (1392～1466)	
第9編	永正5年～永禄11年 (1467～1568)	
第10編	永禄11年～天正10年 (1508～1582)	
第11編	天正10年～慶長8年 (1582～1603)	
第12編	慶長8年～慶安4年 (1603～1651)	

【1】の各部編は現在も刊行中である。言い換えれば未刊行の部分が相当あるわけで、未刊行部分を研究しようとしたら、【1】が使えないというのは不便である。このことは相当早くから問題視されたようで、これに応えるために刊行されたのが【2】である。

【2】は、【1】の網文と引用史料名だけを年代順に並べて収録したもの。【1】の未刊行部分であっても、これを見ると史実とその典拠となった史料名がわかるようになっている。該当の史実の典拠を知りたいときは、典拠史料を当たればいいわけである。当たればいいといっても、それが翻刻公刊されているとは限らず、公刊されていないければ、所蔵機関を当たらなければいけないわけであるが…。ただ、ここに採録されている史料は東大史料編纂所の史料採訪によって収集されたものなので、少なくとも史料編纂所を訪ねればその写しは所蔵しており、閲覧することができる。もちろん、【1】の刊行部分と比べれば便利さは雲泥の差であるが、それでも、調べる手段があることの意義は大きい。

このように【2】は【1】と一体として使うことが前提の史料集なので、【1】のみを所蔵している図書館はぜひとも【2】も備え付けてほしい。

もうひとつ部編分けの弊害として、編纂時期のずれから来る採録漏れの問題がある。【1】の各部編は、収録範囲の初めから編纂が進んでいった。編纂の開始は明治時代で、今なお刊行中であるので、明治の時点から現在までに新しい史料が発見されたものが多々ある。近年刊行の部分についてはそれらが取り入れられているが、編纂時期が昔になるほどそれらの採録もれがあるということになる。例えば第11編の冒頭は本能寺の変であるが、この部分は明治期までに知られていた史料のみが記載されている。そのため、編纂時期にもよるが、【1】に引用されているものしか史料がないと思いきまないように注意が必要である。

【3】は【1】と【2】をインターネット上で検索できるデータベース。「網文」「書目」

「本文」「索引」の4つから検索できるが、一般に使いやすいのは「綱文」検索だろう。例として「直江兼続」で検索した場合の使い方を説明しよう。

<大日本史料総合データベースの使い方（例）>

- ① 前記 URL に接続し、データベース選択で、「大日本史料総合データベース」を選ぶ。
- ② キーワードに「直江兼続」と入力、検索対象「綱文」にチェックを入れる。
- ③ 検索すると、45件の文書がヒットする。
- ④ 試みに「天正11年9月25日」の文書を選んで「詳細」をクリックすると、詳細表示が出る。
- ⑤ 綱文には、「越後新発田の新発田重家、上杉景勝を同国法行橋に襲ふ、景勝の老臣直江兼続、高梨外記の法行橋に於ける戦功を褒す」とあり、この日、法行橋というところで上杉景勝が新発田重家に襲撃され、高梨外記という武将が景勝を守って戦ったこと、その戦功を直江兼続が褒めたということがわかる。
- ⑥ この文書の全文が読みたいと思ったら、「刊」ボタンをクリックすると、画像ビューワー画面に切り替わり、1ページずつクリックしていくことで、全文が読めるようになっている。ただし、これはやや手間がかかるので、前画面にもどって、収録箇所を見ると、「11編5冊93頁」に収録されていることがわかる。
- ⑦ 通常は図書館の書架に行って「11編5冊93頁」を探してコピーした方が効率的だろう。ただし、このように自宅にいながらにして全文を読むことができることは知っておくと便利である。

【4】『大日本古記録』刊行中

【5】『大日本古文書』刊行中

【6】『大日本近世史料』刊行中

【7】『東京大学史料編纂所報』刊行中

【4】～【6】は【1】に続いて刊行された東大史料編纂所発行の史料集。いずれも刊行中。これらはどれも収録史料が【1】と重複する場合がある。【1】は編年体に並べ換えているので、ある時期に何があったかを総合的に調べるのに適しているのに対して、【4】～【6】は史料を原秩序のままに収録しているので、ある地域や集団（寺社や大名家など）に何があったかを調べるのに適している。

【4】は日記類でまとめて後述する。

【5】は古代～近世の古文書を集めたもの。大名家や寺社などの所蔵者（旧蔵者）別に巻構成した「家わけ」と幕末の幕府外交文書等を収録した「幕末外国関係文書」からなる。「家わけ」収録史料は下記のとおり。

正倉院編年文書・高野山文書・浅野家文書・伊達家文書・石清水文書・相良家文書・観心寺文書・金剛寺文書・毛利家文書・吉川家文書・東寺文書・小早川家文書・上杉家文書・阿蘇家文書・熊谷・三浦・平賀家文書・山内首藤家文書・島津家文書・大徳寺文書・醍醐寺文書・東福寺文書・蜷川家文書等

【6】は近世史料を収めたもの。幕府・各藩の文書を多く収める。収録史料の一覧は【60】の52頁にある。基本的にほとんどが武家文書である。前述のとおり、近世史料は悉皆

的な翻刻がなされていない。武家（幕府・各藩）を研究対象とするなら有用だが、地域史・商業史・宗教史等の場合は、地方（じかた）文書等の一次史料をじかに読む必要がある。

【7】は、その時々の【1】、【4】～【6】などの東大史料編纂所の刊行物について、収録内容の概要説明が載るので、内容の把握に便利である。私は内容説明の部分だけコピーしてホチキスで綴じておいてある。

【8】『寧楽遺文』全3巻

【9】『平安遺文』全15巻

【10】『鎌倉遺文』全42巻

【11】『鎌倉遺文フルテキスト CD-ROM』（2008年発売）

【12】『「鎌倉遺文」にみる中世のことば辞典』

【13】『南北朝遺文』刊行中

【14】『戦国遺文』刊行中

【8～10】は故竹内理三氏の編纂になる編年史料集三部作。

【8】は、奈良時代の史料を収める。上中下3冊で政治篇・宗教篇・経済篇・文学篇に分かれ、戸籍・計帳・正税帳・四度公文枝文・太政官符・寺院縁起並流記資財帳・献物帳・造寺所公文・写経所公文・諸国田券・奴婢帳・風土記・人々伝・詩集・人々啓状・金石文・補遺から成る。収録文書の大半は正倉院文書である。

【9】は、平安時代の文書を編年順に配列した史料集。

【10】は、鎌倉時代の古文書を網羅し、編年順に集成した史料集。索引編には「地名索引」「人名索引」が収められている。

【9】、【10】は【3】でインターネットから全文検索ができる（2007年公開）。一般的な使い方は以下の通り。

<「平安遺文・鎌倉遺文フルテキストデータベース」の使い方>

- ① ウェブブラウザで【3】に接続し、「平安遺文フルテキストデータベース」か「鎌倉遺文フルテキストデータベース」を選ぶ。
- ② 「コンコダンス表示」を選んで、キーワードを入れて検索する。
- ③ ヒットしたものが、KWIC形式（Key words in context。ヒットした検索語の前後の文脈が表示される形式）で表示され、【9】または【10】の収録巻号、ページ、文書番号が表示される。【1】の場合と違い、全文イメージの表示はできないので、収録箇所をメモして、図書館の書架へ探しに行く。

【11】は、【10】の全文を検索・閲読できる CD-ROM。【3】との違いは、検索結果から全文の表示ができることと、一部ながら、原文に忠実な字を表示するために外字を収録している点である。

【12】は工具書。【10】に収録の史料から中世のことばの語義を解説した辞典。これには2つの使い方がある。ひとつは史料に出てくることばの語義がわからないときに調べるといふもの。もうひとつは、【3】や【11】を検索するとき、そもそもどういうワードで検索したらいいかわからないということがあると思う。そのため、知りたい事柄について、中世のことばではどう表現していたかを調べるという用途で使うことができる。

【13】は、南北朝時代の史料を収めた史料集で、地域ごとの分冊構成となっている。現

在、九州編と中国四国編が刊行完了し、関東編と東北編が刊行中である。

【14】は、同じく刊行中の史料集で、戦国時代の史料を収める。戦国時代の史料は膨大な数にのぼるといふことで、編年式の編纂は断念し、大名家毎の編集方針となった。【1】で見たように編年式では便利な反面、収録数が多いと悉皆的な収録が難しいといううらみがある。その点で家分けでの編纂のメリットは大きい。現在「後北条氏編」「武田氏編」「古河公方編」「佐々木六角氏編」が刊行されている。

【4】『大日本古記録』（再掲）

【15】「記録年表・記録目録」（『国史大辞典』4巻、461頁所収）

【16】「日記一覧」（『日本史広辞典』所収）

【17】「日記表」（『新版 角川日本史辞典』所収）

【18】『増補史料大成』全48冊

【19】『増補続史料大成』全51冊

【20】『史料纂集 古記録編』刊行中

【21】『史料纂集 古文書編』刊行中

【22】『図書寮叢刊』刊行中

【23】『日本歴史「古記録」総覧』〈古代・中世編〉〈近世編〉2冊

【24】『古文書古記録語事典』

次に日記を収める史料集を紹介する。上記の他に叢書系の【25】～【27】にも相当数を収める。

日記は正しくは記録または古記録と言ひ、近年研究が進むとともに、刊行も進んでいる分野である。文字通り同時代を生きた人の日々の記録であり、一次史料として貴重である。ただし、中世末期に至るまでは、ほとんどが公家または寺社によって書かれている点に注意が必要である。日記を利用した興味深くかつ一般にもわかりやすい研究成果の例として、【65】を挙げたい。一方近世以降では武士・商人・村役人なども日記を記すようになるが、これらは一部しか翻刻されていない。

日記を調べる際には、【15】で「ある年に何という日記が書かれていて、翻刻または影印はどの史料集に収録されているか」が年表形式で引けるようになっているので、まずこれを参照すべきである。ただし、【15】は中世末までの収録であるので、近世以降は【16】【17】を参照する。【16】は現代まで、【17】は明治初年までを収める。なお、以下の各史料集の説明では個々の収録日記名は割愛する。

【4】は東大史料編纂所が編集し刊行中の史料集で、藤原道長『御堂関白記』、藤原実資『小右記』ほか著名な日記を多く収める。【60】に収録日記名一覧がある。

【18】は、昭和9～19年にかけて発刊された『史料大成』を根幹とし、『歴代宸記』『台記』『春記』『宣胤卿記補遺』等7種を増補、一部改訂を施して刊行したもの。平安・鎌倉・室町時代の公家の日記を集大成した史料集。

【19】は、文科大学（現東大文学部）『史誌叢書』中より主要な日記・記録類14種を精選し、その他の記録類も統合して刊行された『続史料大成』を、新たに史料を追加し、編成替えをおこなって刊行したもの。平安・鎌倉・室町・安土桃山にわたる公家・武家・寺社家の古記録を収める史料集。

【20】【21】は、古代から近世までの各時代に、重要なものでありながら当時未刊であった史料、また既刊であるが再校訂が学術的見地より要請されるものを厳密に翻刻し、逐

次刊行しているもの。古記録編と古文書編に分けて刊行されており、古記録編は2008年に150号に到達した。古文書編の主な収録史料は以下の通り。

青方文書・飯野八幡宮文書・入江文書・賀茂別雷神社文書・北野神社文書・朽木文書・熊野那智大社文書・気多神社文書・光明寺文書・五條家文書・西福寺文書・澤氏古文書・潮崎萬良文書・橋爪文書・大樹寺文書・長樂寺文書・言継卿記紙背文書・潮崎稜威主文書・米良文書・歴代古案・別本歴代古案 等

【22】は宮内庁書陵部所蔵図書のうち、特に資料的価値の高いものを翻刻した叢書。日記の他は和歌集や蔵書印譜など、史料としての利用場面が限られるものが多いが、『九条家文書』『壬生家文書』などの公家に伝わり、明治維新後皇室に寄贈された古文書類も収める。

【23】は工具書。おもな日記（古記録）について、記主や対象年代、原本の伝存状況などを解説している。日記に関する工具書として貴重だが、欲を言えば内容に関する解題があるともっと助かる。

【24】は、古代・中世の古文書・古記録に表れることばの中から、約9,500語を採録した辞典。古文書・古記録を読んでいる中で、わからないことばがでてきたときに引くために使う。

【25】『群書類従』全30冊

【26】『続群書類従』全86冊

【27】『続々群書類従』全17冊

【28】『群書類従 正統総目録・書名索引・文献年表』

【29】『群書解題』全22巻

【30】『新訂増補国史大系』全66巻

【31】『改定史籍集覧』全27冊

【32】Google ブック

<http://books.google.co.jp/>

【25】～【31】は叢書類を紹介する。

【25】は、江戸時代の国学者・堀保己一によって編纂された古今の文書・典籍を集めた我が国最大規模の叢書。【26】～【27】はその続編。文学作品や史書、各種資料を収める。江戸時代初期以前の文献をジャンル別に25部に分けて収めている。特に史料として役立つと思われる部分は以下の通り。

「補任部」は公卿などの人事についての記録を収める。「日記部」は和泉式部日記などの平安時代の日記類を収める。「合戦部」は『明德記』『将門記』等の軍記物語・合戦記を収める。合戦記は多くの場合史実を潤色しているため、史料批判を加えて利用することが大事である。「武家部」に収める「御成敗式目」を初めとする武家法・分国法類も史料として重要である。

【25】～【26】の収録史料を調べるには、【28】を参照する。「イロハ順」の索引と、史料の成立年代順の年表索引、部編ごとの収録書目一覧を収める。

【29】は【25】～【26】の収録書目約3500点の各々について、詳細な解題を収めるもの。それぞれ一点ごとに、書名・作者・成立・内容・本文・諸本・参考文献の七つの項目を設けて詳述し、これによって文献の異称、書名の由来、諸写本、類似の文献の所在、

研究経過、参考とすべき論文などがわかる。あとで紹介する【45】のような工具書と組み合わせ使うといいだろう。

なお、【25】～【27】の刊行を担っていた続群書類従完成会が2006年、事実上倒産し、八木書店がその事業を引き継いだ。その八木書店が【32】の協賛事業者となっているため、【20】、【21】、【25】～【27】の膨大な量のテキストはインターネット上で全文の検索・閲覧ができるようになっている。その便利さは、インターネットのない時代に比べて隔世の感がある。

【30】は、古代から近世に至る58書目を収載し、基本的史料を多く収める史料集。主な収録書目は以下の通り。

百練抄・扶桑記略・帝王編年記・続史愚抄・今昔物語集・愚管抄・栄花物語・水鏡・大鏡・今鏡・増鏡・古事談・十訓抄・本朝文粹・本朝文集・公卿補任・尊卑分脈・後鏡・続史愚抄など

このうち『後鏡』・『続史愚抄』は、【1】の未刊部分を補うために使うことができる。いずれも江戸時代に編まれたもので、編年史料集の体裁をとっている。『後鏡』は室町時代末まで、『続史愚抄』は正元元年（1259年）から安永8年（1779年）までを収める。

【31】は埴保己一の『群書類従』を範に、これに収められていない資料を集めた『史籍集覧』を改定したもの。1900（明治33）年から1903（明治36）年にかけて刊行された。通記・纂録・別記・雑・篇外に区分し、安土桃山から江戸時代の比較的大部な資料も多く収録している。収録書目やその解説を調べるには、『改定史籍集覧 総目解題及書目索引』を引く。主な収録書目は以下の通り。

校本扶桑略記、校本一代要記、愚管抄、神明鏡、神皇正統録、宇多天皇実録、續世継、月のゆくへ、池の藻屑、櫻雲記、南方紀傳、菊池傳記、浪合記、信濃宮傳、十津川記、底倉記、應仁前記、應仁廣記、續應仁後記、南山巡狩録、北条九代記、鎌倉大草紙、鎌倉九代後記、關八州古戦録、北条五代記、浅井三代記、朝倉始末記、太閤記、南海通紀、豊薩軍記、安西軍策、奥羽永慶軍記（以上、通記類のみ）

【32】は著作権者との契約により書籍をデジタル化し、全文を検索・閲覧できるサービス。前述のように歴史研究に有用。

【33】 県史・市町村史

【34】『全国地方史誌総目録』 2冊

【35】『全国市町村史刊行総覧』

【36】『地域研究・郷土資料図書目録』 3冊

【37】『県史誌内容総覧』 刊行中、2009年～

県史・市町村史（自治体史）は言うまでもなく各自治体の歴史をまとめた書物だが、一面で極めて貴重な史料集でもある。すべての自治体史にあてはまるわけではないが、多くは「通史編」と「資料編」に分けて刊行され、資料編に歴史史料を収める。

これまで見てきた史料集はすべて全国レベルのものだったが、自治体史は限られたエリアの歴史を扱うだけに、総じて濃密で悉皆的に史料が収められている。そのため、実際の研究

に際しては、もっぱら自治体史収載の史料に頼ることも多い。これは収録史料の内容もさることながら、例えばある範囲の文書群を編年順に並べて収めていたりという編集による便利さも大きい。

また、近年刊行の自治体史は、通史編の内容もかつてよりよほど進歩しているが、併せて、資料編も史料集としての充実度も高いものが多くなっている。一例として、以前私が上杉氏について調べて際に参照した『上越市史』は、資料編として『上杉氏文書集』2冊組を収めるが、これは上杉氏の関係古文書を編年順で悉皆的に収めた上に、各収録年の先頭にその年の上杉氏の動きと、それに対応する史料番号を付す解説文が載っている。上杉氏について調べるにはなくてはならない史料集となっており、市史の一部ではなく単独の史料集としても十分に刊行ニーズのある優れたものである。

さらに付けくわえれば、近世史については、武家文書を除いて全国レベルでのまとまった翻刻はなされておらず、参照できる翻刻史料は自治体史に収められたものにほぼ限られる。個別には各自治体史の収録方針によるが、かなりしっかりと収められている場合もあるので、原史料を探す前のステップとして必ず確認すべきだろう。

なお、各資料編とは別に、「市史編纂資料」などの名称で随時自治体史発行の史料集が刊行されている場合もある。例えば山形市の場合は『山形市史編集資料』として81号まで刊行されている。

【34】は自治体史を検索するための工具書。2007年3月まで刊行の自治体史を収める。

【35】は1945年から1988年3月までに刊行された自治体史を収める。

【36】は自治体史を含む地域史研究資料を収める。

【37】は県史の内容を総覧できる工具書であり、日外アソシエーツ社から刊行が始まったばかりで、残念ながら内容はまだ未見。図書館必備のものになると期待している。

【38】『越佐史料』、『越中史料』、『信濃史料』、『加能史料』、『愛媛県史』、『神奈川県史』、『埼玉県史』、『群馬県史』、『静岡県史』ほか

【38】は、地域を区切った編年史料集。『越佐史料』は越前・越後・越中と佐渡が対象。『加能史料』は加賀・能登が対象。『越佐史料』以下4つは【1】と同じ体裁で網文を付しているので、成立が古いことに気を付ければ、非常によくできた史料集である。

県史の方は、史料を編年順にならべる上記以外はほぼ所蔵者ごとに収める。どちらもメリットはあるが、研究のさい便利なのは編年順のようである。

【39】『中世法制史料集』全5巻

【40】『日本庶民生活史料集成』全30巻

【41】『日本都市生活史料集成』全10巻

【42】『近世地方経済史料』全10巻

【43】『織田信長文書の研究』全2巻

【44】『徳川家康文書の研究』全4冊

【39】～【44】はテーマ別の史料集を紹介する。

【39】は鎌倉幕府法・室町幕府法・戦国大名の分国法・家法などを収める史料集。法制史の場合のもとより、歴史学においては法律＝「きまり」を検討することで当時の人々の生活や制度を検討することにもなるから、法制史以外の研究でも重要である。【3】で全文を

対象に検索できる。結果は KWIC 方式と巻号・ページが表示されるので、これが要不要の判断材料と本文入手の際の手がかりとなる。(【10】の検索方法と基本的に同じ)

【40】、【41】は近世の日記や著作を翻刻したものをテーマ別に巻編成して収めた史料集。私は書名から「宗門人別改帳」「三下り半」などの一次史料が収められているのかと想像したのだが、そうではない(ただし、一次史料を収めた巻もある)。収録史料の詳しい解題が翻刻文の前にあり、全巻を通しての一覧や索引は別巻に収められている。下記の加藤秀俊氏のウェブページに収録史料の一覧と簡単な解題が掲載されているので、こちらも便利である。多様な書目を収録し、例えば有名などころでは『前田慶次道中日記』、『世事見聞録』、『浮世の有り様』などを収める。

『日本庶民生活史料』『日本都市生活史料』解題(加藤秀俊氏)

<http://homepage3.nifty.com/katodb/doc/resource/>

【42】は、経済関係の史料集。【40】、【41】と同じく書目になっているものを主に収める。その内容は、藩政庁の役人、村役人、商人等による聞き書きや覚書、業務引継書などが多い。

【43】、【44】はそれぞれ信長、家康の発給文書の研究書だが、それぞれの文書を集中的に収めているので、研究内容と併せて史料集としても利用できる。信長・家康を研究する際の座右の書ということができる。ただし、収録しているのは信長・家康の発給した文書だけで、通信や戦の相手方となった勢力の文書は収録していないので注意する。

【45】『日本史文献解題辞典』全1冊

【46】『史籍解題辞典』上下巻

【47】『国史文献解説』正統2冊

【45】～【47】は史料を探すための工具書。諸書に引かれている史料について内容がわからないときに解題を探す場合は、3つとも役立つのだが、最近になって【45】が刊行されたことから、史料名から翻刻を探す場合にはこれが決定版となっている。

【48】史料情報共有化データベース

【49】史料所在情報検索システム

【50】日本古典籍総合目録データベース

【51】日本古典資料調査データベース

【52】日本古典文学本文データベース

【48】～【52】の URL(国文学研究資料館 電子資料館)

http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html

【48】～【52】は国文学研究資料館(国文研)の運営するデータベース。いずれも無料で利用できる。

【48】は各地の原史料の所在を収録するデータベース。キーワードを入れることで関連する史料群の所在がすぐにわかるのは便利。ただし、所蔵機関が自ら入れているデータではないため、データ内容の精粗が激しい。

（**検索例**）試みに天童藩領（山形県天童市）の資料を検索してみることにして、キーワードに「天童」と入れて検索すると、山形大学附属博物館所蔵の青柳家文書、当館（山形大学附属図書館）所蔵の伊藤家文書、国文学研究資料館所蔵の山口家文書などがあることがわかる。

【49】は全国各地に伝来する史料について、史料群単位の所在とその概要情報を提供するもの。情報源は、文書館をはじめとする史料保存利用機関、図書館、博物館、自治体史編纂室、大学研究室や研究者、個人などが公刊した史料目録類とのこと。キーワードのほか、旧国名、郡・市町村名で検索ができる。簡易版と詳細版があり、詳細版は利用登録が必要で、図書館職員や学生も申請できる。【48】と【49】はセットなので、両方検索してみるべきだろう。

（**検索例**）試みに「出羽国」「村山郡」の史料を通覧するようにセットして検索してみると、106件がヒットした。内容を見ると、『慈恩寺文書調査報告書』、『（山形大学附属博物館所蔵）古文書近世史料目録』等の公刊された史料目録に載っている史料群（〇〇家文書）が表示される。しかし、この106件が現存する古文書すべてでないことは自明なので、とりあえず公刊された目録に載っている文書群にどんなものがあるのかを調べるのに便利と考え、悉皆的なものではないととらえておくことが大事だろう。

【50】は『国書総目録』、『古典資料総合目録』が一度に検索でき、さらに追加情報を加えたデータベース。所蔵機関と翻刻刊本の書誌も掲載している。古典籍の場合はこれで検索して刊本があればそれにあたり、なければ原典所蔵機関を確認して問い合わせる、という手順になる。

（**検索例**）『浪合記（なみあいき）』を検索した場合、写本の所蔵箇所は国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫の他多数にのぼること、翻刻文は『伊那史料叢書』、『改定史籍集覧』、『信濃史料叢書』に収められていることが確認できる。

【51】は国文研の資料調査事業部がおこなってきた、全国の研究機関等に眠る未整理の古典資料の整理作業の成果を検索できるもの。基本的には【50】を補完するものにとらえるといえよう。

未整理の古典資料の整理とは具体的にどのようにするのかというと、まず、国文研から調査を委嘱された調査員（国文学や中国文学専攻の大学教員）が各所蔵機関を訪問し、資料を実見して、「書目カード」を記入する。次いで、国文研は提出された「書目カード」を基にデータベースに入力しウェブから公開する、というふうにおこなわれている。この調査は単年度では終わらず、長期にわたってこつこつと積み重ねられている。

【52】は『日本古典文学大系』の本文（ほんもん＝テキスト）を対象に検索ができるもので、同叢書には『太平記』『平家物語』などの史料として利用できるものが含まれているので、歴史研究にも役だつ。なお、利用は登録制（無料）。また、収録テキストは『新日本古典文学大系』ではないことに注意。

【53】『訳注日本史料 延喜式』刊行中

【54】『戦国史料叢書』全21冊

- 【55】『新異国叢書』全35巻
- 【56】『重宝記資料集成』全45巻
- 【57】『往来物解題事典』
- 【58】『日本教科書大系 往来編』全15巻、別巻2

最後はやや特徴的な史料集を紹介する。

【53】は「延喜式」の原文、読み下し文に頭注（ページ上部に載せる短い注釈）、補注（巻末に載せる詳しい注釈）を付したもので、現在（2009年11月）上中下三巻組の中巻まで刊行されている。

延喜式は古代律令制の法律「律・令・格・式」の一番下位の「式」の1つであり、「律・令・格・式」のうち、唯一ほぼ完全な形で現存するもの。言わば法律の実施細則、現在でいえば省令や通達にあたるもので、実務的な事細かな規定がびっしりと記載されている。

上巻には祭祀関係の「神祇部」を収め、中巻には「太政官」「内蔵寮」「陰陽寮」「図書寮」などの諸官庁の規定を収める。

本書に収められた注記の詳細をきわめ、一言では紹介しがたいので、是非実物を参照してほしい。時代が遡るほど、現存する史料は少なくなるため、テキストを入手するのは容易であり、問題なのはテキストをいかに読み込むかということになる。そのさいに本書のような詳細な注釈書は大きな助けとなる。

【54】は「武田史料集」「太閤史料集」など家分けの巻構成になっている。体裁からまともな史料集を想像するが、中身は『太閤記』や『甲陽軍鑑』、『甫庵信長記』などの合戦記・稗史の類である。とはいえ、それらを参照したい場合には便利である。

【55】は安土桃山時代から幕末にかけて、来日した外国人が記録した旅行記や日記を収めた叢書。収録書目は以下の通り。

イエズス会士日本通信 イエズス会日本年報 デ・サンデ天正遣欧使節記 セーリス日本渡航記 ヴィルマン日本滞在記 ティチング日本風俗図誌 ペリー日本遠征随行記 エルギン卿遣日使節録 ポンペ日本滞在看聞記 ゴンチャロフ日本渡航記 オイレンブルク日本遠征記 アンベール幕末日本図絵 ペリー日本遠征日記 ハイネ世界周航日本への旅 グレタ号日本通商記 ホジソン長崎函館滞在記 ヘールツ日本年報 シュリーマン日本中国旅行記 パンペリー日本踏査紀行 ディアス・コバルビアス日本旅行記 ギメ東京日光散策 レガメ日本素描紀行 グラント將軍日本訪問記 クロウ日本内陸紀行 メイラン日本 マローン日本と中国 バード日本紀行 スポルディング日本遠征記 オズボーン日本への航海 モースのスケッチブック レフィスゾーン江戸参府日記 スミス日本における十週間 アーノルド「ヤポニカ」 シェイス「オランダ日本開国論」 ドーフ日本回想録

【56】は史料集とは趣がすこし異なるが、近世の庶民向け生活ハンドブックともいうべき「重宝記」から特に貴重なものを影印して集成したもの。近世の庶民生活に取材するなら、史料としての活用が期待できる。

【57】は工具書。近世の寺子屋で教科書として使われた「往来物」と言われる書物の解題を集めた事典。往来物は観光ガイドブックのような『〇〇往来』や偉人の書状に擬した『〇〇状』などを指し、手習いの教本として使われた。これも史料として使えるかどうかは研究テーマによるが、近世の教育史や庶民文化史であれば関わってくるだろう。

【58】は往来物のテキストを収める叢書。

6. 史料の現代語訳について

以上で史料集の紹介は終わるが、「史料の現代語訳」についてすこし考えてみたい。当たり前のことではあるが、史料はそれが書かれた当時の言葉（文語）で書かれているので、原文のまま読むには和製漢語などを読む訓練が必要である。

史料集の収録形態としては、原文・読み下し文・現代語訳があり、研究に際し検討する場合には原文で引用することになるので、現代語訳は通常軽く見られている。

しかし、学生の学習・研究用としてとらえた場合、また別の位置づけもできるのではないかと思う。4年生で卒論を書く時点までに原文で史料を（早く）読みこなすスキルを習得できない学生もいるようだし、そうでなくても、原文より現代語訳で読んだ方が早いことは間違いないので、一言一句を検討する場面ではともかく、史料全体の大意をつかみたい、という段階では、現代語訳も有効ではないかと思う。

幸いに近年一般の人でも気軽に史料に触れられるようにとの趣旨で、現代語訳版の出版があいついでいる。近年刊行の主なものには以下のものがある。図書館備え付けの図書の選書の際には、これら史料の現代語訳版の購入を検討してはいかがだろうか。

『現代語訳 吾妻鏡』五味文彦・本郷和人編、吉川弘文館（2007年～）

『現代語訳 信長公記』新訂版、上下巻、中川太古訳、新人物往来社、2006年

『全現代語訳 日本後紀』上中下三巻、森田悌訳、講談社学術文庫、2006年

『全現代語訳 藤原道長「御堂関白記」』上中下三巻、倉本一宏訳、講談社学術文庫、2009年

なお、私は別に現代語訳や読み下しだけで卒論を書くように推奨しているわけではない。史料の読解については、【59】の以下の文を引いて答えに代えたい。

中世史について言えば、卒業論文までのレベルで、原史料のくずし字や文書様式を判読する必要はまずない。くずし字は読めるに越したことはないが、大切なのは中世に用いられた史料の形式や独自の用語について慣れて、中世の人間のボキャブラリーに近づく努力をすることであろう。（中略）こういう状態に近づくためには、活字本の史料をできるだけ大量に読むことである。初めはわけのわからない言葉ばかりであっても、読みこなすうちに文脈の上でどういう内容の言葉が入るかという推理能力がついてくるはずである。（221頁）

7. 実践編1 織田信長の初陣

ここからは実践編として、レファレンス協同データベースに搭載されている事例を元にして、実際の史料の探し方の例を紹介してみよう。

【質問】織田信長の初陣（14才の時）の時期はいつか。

【回答】『織田信長総合事典』などの信長関係資料には、「天文16年（1547）三河大浜（現

愛知県碧南市)へ初陣」との記述はみられますが、何月頃か詳しい記述はありませんでした。そこで初陣の地である碧南市の資料をみると、『碧南市史』に掲載されている「碧南市史年表」に「同年10月」とありました。

この質問への回答例のように、歴史関係の質問であるのに、近現代の著作や編纂物だけを示して、直接の典拠を示さない例がある。歴史学として検討するためには、典拠史料を示さなければどの程度の信頼度なのか判断がつかないのだから、このような回答では本来不十分と言わざるをえない。

では、よりベターな答えをみつけるために、早速史料を探していこう。

このような、時期を特定する調べ物の場合は、編年式史料集が便利である。そこで、【2】の天文16年を含む9巻を引く。天文16年10月のページを開いて事項を拾っていくが、該当の記事は見つからない。仕方がないので、1月から順に見て行くと12月の項目の後に該当の記述が見つかった。

織田信長、初メテ兵ヲ率キテ、三河大濱ヲ侵ス 『信長公記』、『甫庵信長記』

12月の後ろに挙げてあるということは、年がわかっているだけで、月日は不明なのだろう。そこで典拠史料の『信長公記』を確認する。OPACで検索すると、『信長公記』は【31】に収録されていることがわかる。該当箇所を引くと以下の通り。

吉法師殿十三の御歳林佐渡守平手中務青山與三右衛門内藤勝介御伴古渡の御城にて御元服織田信長と進められ御酒宴御祝儀不斜 翌年織田三郎信長 御武者始として平手中務丞其時の仕立くれなみ筋のつきんはをり馬よりひ出立にて駿河より人数入置候三州之内吉良大濱へ御手遣所々放火候て其日ハ野陣を懸けさせられ次日那古野に至て御帰陣

13歳の年に信長が元服し、その翌年と述べているので、生まれ年から天文16年は間違いないことがわかる。しかし、月日については述べていない。もうひとつの『甫庵信長記』は、『信長公記』をリライトしたものであることは前述の通り。

つまり——信長の初陣の時期について、「天文16年という以上のことは不明」が正解だったのである。ここにレファレンスの難しさがある。当然ながら、嘘や不正確なことを言うてはいけない。だから、学術的な意味で「不明」ということは当然ありうるのだが、「わからないということが（確信をもって）わかる」ことが実はなかなか難しいのである。

今回私は『碧南市史』が手元にないため確認できなかったが、なぜ同書は10月としていたのだろうか。もしかしたら、初陣の時期が特定できるような史料が発見されていたのかもしれない。識者のご教示を乞う次第である。とはいえ、今回述べたかったのは、回答に際しては一次史料を引くべきだということに尽きる。

8. 実践編2 観応の擾乱(かんのうのじょうらん)を引き起こした怪僧

【質問】室町時代の禅僧「大同妙喆」(だいてうみょうてつ)について書かれた資料が見たい。『日本仏家人名辞書』(東京美術)に掲載されている。高師直と足利直義の争いである「観応の擾乱」に関係した人物で、後醍醐天皇から額もしくは書をもらい、群馬のそうふく寺(漢字形不明 現在廃寺らしい)にいたらしい。

【回答】①『日本仏教人名辞典』（法蔵館）に記述あり。「鎌倉後期の臨濟宗の僧侶。生没年不詳 生：陸奥（福島） 事：下野雲巖寺の顕日の法を嗣ぐ。陸奥福島（福島）に一寺を創建し、上京して北禅寺の始祖となる。のち、真如寺や鎌倉浄智寺に歴住した。晩年正印庵を建てて退休。」とあり。

②『日本の歴史 9 南北朝の動乱』（中央公論社）p242、243 に関連する記述あり。「師直は兵を集めて直義を撃とうとした。直義は危うく尊氏の邸にのがれたが、師直軍は尊氏の邸宅を包囲して、師直排斥の中心人物と目される直義の側近、上杉重能、畠山直宗、禅僧妙佶（みょうきつ）の身柄引き渡しを求めた。・・・けっきょく、尊氏の調停で和解が成立した。和解の内容はつぎのとおりである。 上杉重能・畠山直宗は師直に引き渡さず、流罪に処する。（妙佶はいち早く逃亡した。）・・・」

③『大日本史料 第六編之十二』（東大出版会）p849-884 に関連する記述あり。

「[師守記] 高師直等、尊氏ノ第ヲ囲ミ、上杉重能、畠山直宗、僧妙吉等ヲ得ンコトヲ請ウ・・・」

「[園太暦]・・・所詮上相伊豆守畠山大蔵少輔僧妙吉・・・其後評定、上相畠山事、早可被配流、賜敵人事且無例歟、妙吉ハ逐電云々・・・」

【事前調査事項】元の質問は大同妙吉（だいどうみょうきち）だったが正しくは大同妙喆（みょうてつ）

『日本人名大事典 3』（平凡社）に「大同妙喆」あり。後醍醐天皇との関連情報はなし

この質問への回答は、【1】を引いて『師守記（もろもりき）』と『園太暦（えんたいりやく）』という一次史料を紹介しているのだから、理想的な回答と言っていいのかもしれない。……だが、ちょっと待ってほしい。おそらく質問者の希望は、妙吉がどのような人物かを知りたいということではないだろうか。回答からは「観応の擾乱」に関与して処罰されそうになり逐電したことはわかるものの、肝心な観応の擾乱に際し何をやったのかと、なぜそういうポジションに付くことになったのか、といういきさつや経歴といったことがわからない。このように史料をポンと出すだけでは、正しいかもしれないが、不親切になる場合がある。もし私が質問者だったらもう少し丁寧な回答が欲しいと思う。

では、よりベターな回答を探すにはどうしたらいいか。史料探しを試みよう。

まず南北朝と聞いてすぐに思い浮かぶのは『太平記』である。そこで、【52】で探す。これは『日本古典文学大系』の全文を検索できる便利なデータベースである。『太平記』を選び「妙吉」で検索すると、巻26に登場することがわかる。

『太平記』は現在のところ全文現代語訳は刊行されていない。このようなときは読み下し文と注を付した『新潮日本古典集成』を参考にしつつ、「妙吉」登場部分を抄訳してみよう。（なお、【72】に柳田俊一氏による全文現代語訳が掲載されているので、こちらも参考にさせていただいた）

この頃、足利直義は、将軍・尊氏の代理として天下の権力を握ってからというもの、ますます禅宗への帰依を深めていき、夢窓疎石の弟子となり、天龍寺を建立したり、説教の場や法要の座に頻繁に出席したり、多額のお布施をして、世間を驚かさないとはいえないほどだった。

ここに夢窓疎石の弟子の一人、妙吉という僧がいた。これを見て羨ましいと思った彼は、

仁和寺の僧・志一坊という外法を得意とする人があったので、彼のもとを訪ね、ダキニ天法を習ってこれを会得した。(中略)

これ以降、夢窓疎石もこの妙吉を高く評価するようになったので、直義の元へ参上した時に言うことには、「仏道修行のため、日夜参禅していただいて、未熟でいらっしやるところをお教え申し上げるべきですが、道中遠いものですから、往復するのは大変なことと心配しております。そこで今日からは、ここに連れてきています妙吉と申す同門の者をおそばに参上させましょう。先師の教えをかがいしくお教えしたり、達磨大師の教えを直接に受け継いだものであることについては、おそらく誰にも劣らない者ですから、私の代理として常に対座させて、禅についての相談に応じさせましょう」と言って、早速妙吉を直義の元へ派遣した。

直義は一度この僧に対面したときから、心酔すること甚だしく、インドの禅宗の祖・達磨大師が再び我が国にいらして、禅宗の教えを示されたかと思われるほどだった。(中略)

このように、多くの人が妙吉を敬い尊敬したけれども、高師直・師泰兄弟は、その僧の知恵も学才もたいしたことはあるまいと馬鹿にして、一度も会いに来ようとしない。それどころか門前で馬を降りることさえせず、路上ですれ違う時も、僧衣を足先で蹴ろうとするほどの振る舞いだった。妙吉はこれを見て、不快に思い、物語の端、事のついでに、高兄弟の振る舞いは穏便でないと非難するようになった。

これを聞いた上杉重能・畠山直宗は、それは絶好の機会だ、高兄弟を讒訴し失脚させるためには、この僧にまさる人はいないと思ったので、やがて妙吉と親交を深くして、こびへつらって、さまざまに高兄弟を非難するようになった。

(中略。妙吉は直義に対面し、秦帝国の滅亡エピソードを語り、婉曲に高兄弟を非難する)「このようにして、かくも強大を誇った秦帝国も、わずか2代にして亡びてしまったのは、ただ超高の驕りの心から出たことでした。つまりは、古の世においても今の世においても、治世者の家が代々続いていくか滅びてしまうかは、それを支える重臣の善悪にかかっているというわけです。さて、今、高兄弟の振舞いをみていますと、これではとても世の中は静かにはなるまいと思われてなりません」

(中略。直義は高兄弟を排除することを決意するが、情報がもれ、かえって高兄弟によって逆襲を受け、逼塞状態に追い込まれる)

将軍・尊氏は、高兄弟の諫言がもっともなことだと思ったので、「師直の申し出たとおりに、今後は直義殿を政治に参与させてはならない。上杉・畠山を流罪にせよ」と認めた。師直はたいへんに喜んで、御所の包囲を解いて退いた。翌朝、すぐさま妙吉を捕縛しようと人を遣わしたところ、すでに逐電したあとで、行方も知れなかった。その財産は、方々へ持ち去られ、浮雲のようなはかない富と地位は、たちまち夢のごとくに消え去ったのだった。(『太平記』巻26)

このように、(1) 妙吉は夢窓疎石の弟子で、修行の成果などから師から高く評価されるようになっていったこと、(2) 夢窓疎石が妙吉を自分の代理として足利直義に紹介したこと、(3) 直義の信頼を得た妙吉は高師直・師泰兄弟を失脚させるために、秦帝国を滅亡させた超高の例を出すなどして彼らを讒訴したこと、(4) 「観応の擾乱」が勃発し、高兄弟が直義を襲撃すると直義は降伏し、妙吉の身柄引き渡しに応じたが、そのときにはすでにどこかへ逐電(逃亡)していたこと、といったことが述べられていることがわかる。

これで妙吉についてのアウトラインはわかったが、『太平記』は史書というよりは軍記物語であるので、すべて史実ということとはできない。そこで、この部分の史実性を検討してい

る論文を探すことにして、CiNiiを検索すると、【76】がヒットした。

これを参照すると、妙吉が夢窓疎石の弟子だったことは法脈の検討から蓋然性が高いことがわかる。また、直義が妙吉を信頼していたこと、および妙吉が逐電したことは同時代史料の『園太暦』にあるので史実と認定していいことがわかる。

夢窓疎石が妙吉を直義に紹介したというのはどうだろうか。直義は夢窓疎石との対話集『夢中問答』を著したことからも明らかのように、彼に深く帰依していた。二人が同門であること、直義が妙吉を信頼するようになったというところから類推すると、夢窓疎石の紹介と考えても矛盾はない。

では、一次史料『園太暦』の原文を入手しよう。【15】を参照すると、記主は洞院公賢（とういんきんかた）で【20】、【26】に翻刻文が収載されていることがわかる。原文と現代語訳は以下の通り。

近日武衛仰信禅僧妙吉申沙汰云々

（近頃、武衛（足利直義）は禅僧妙吉の言うことを仰ぎ信じているという。『園太暦』貞和5年閏6月2日の条。なお、妙吉の逐電を伝える個所は前記③の通りなので省略）

このようにして、太平記で描かれたことの概略は史実と認定していいことがわかる（もちろん、超高の故事を引用して直義を説得した等のディテールはフィクションだろう）。ここまでの結果を質問者に報告すれば、レファレンスへの回答としては十分だろう。

しかし、私は少し引っかかる場所があった。回答者は「元の質問は大同妙吉だったが正しくは大同妙喆」としていて、二つの名前のうち、一方が誤りとしている。だが、私には①の陸奥に生まれ、下野→京→鎌倉と各地で役職を歴任した高僧と②・③の観応の擾乱に際し暗躍した怪僧とで接点は何もないのみならず、受けるイメージがあまりに違うことが気になった。早い話が、「大同妙喆」と「妙吉」は本当に同一人物なのだろうか？という疑いが生じたわけである。

そこで、別人ではないかという前提に立ち文献を探してみたが、ずいぶん渉獵するも思うようにみつからない。やむを得ず、ウェブを検索すると【69】に行き当たった。ここは以前『明德記』の原文を入手する際にもお世話になったことのある、私の信頼するサイトである。このサイトの「南北朝列伝」中の妙吉伝の一部を下に引用する。

妙吉は同時代にいた高僧・大同妙喆（みょうてつ、?-1366）と同一人物とする話が『鎌倉大草紙』に載っている。妙喆は江戸初期に編纂された名僧列伝『本朝高僧伝』にも伝記が載る人物で、陸奥国の生まれで高峰頭日の弟子ということでは確かに夢窓疎石と兄弟弟子の関係にある。京の北禅寺・真如寺、鎌倉の浄智寺などに移り住んだ人物だが、「大草紙」は「直義の師で、師直に憎まれて鎌倉に下り浄智寺に入った」との記述をした上で「よく物を知らない太平記の作者はこれを『妙吉』と誤記した上に愛宕の天狗の化身のように書いている」と批判している。この記事をもってこの二人が同一人物とする説もあるのだが、「大草紙」自体が「太平記」より百年も後に書かれていること、「園太暦」が「妙吉」と明記していること、「高僧」イメージとのギャップから否定的にみる意見の方が強い。

どうやらカンが当たって、私と同じ考えの記述を見つけた。この後同サイトの管理人氏に尋ねたところ、管理人氏が参考にしたのもまた別のサイトだったとのこと。この後さらに探

すも残念ながら学術的エビデンスとなるような専門家による文献はみつからなかった。管理人氏によると、『新潮日本古典集成』の脚注が何の疑問も持たず、『本朝高僧伝』の大同妙喆の記事を引いて妙吉の説明にあてているとのことだったので、確認したところ、そのとおりであった。なるほど、これでは回答者の図書館員が疑わずに信じたとしても無理はない。

最終判断は読者に委ねるが、私としては上記引用の通り、『園太暦』が「妙吉」と明記していること、二人の経歴に接点がないことから別人説を採りたい。歴史学では二次史料より一次史料を優先するのが鉄則だからだ。

9. 終わりに

今回、このようなガイドを作ってみました。私自身日本史を専攻したというわけでもなく、まったくの門外漢です。図書館で使う“パスファインダー”を作るような感覚で気楽に作ったものです。不正確な点、遺漏ある点が多々あると思います。識者のご教授を仰ぎたいと思います。

最後に浅学の身を省みず、このガイドを作ってみようと思った動機について記しておこうと思います。

第一は、研究者の記したもので、翻刻（活字）テキストをさがすためのガイドがあまり見当たらず、自分自身が不便を感じたからということです。史料からどのようなことが読み取れるかという、研究内容に即した史料の読み方を解説した著書・論文は良書が多数ありますが、意外にどのように探すかを初学者向けに説明したものが少ないと感じていました。とは言え、そこは門外漢の浅はかさ、参考文献に挙げたような良質のガイドがあることを知らなかった面も多分にあります。作成にあたり、これらを大いに参考にさせていただいたことを感謝とともに述べたいと思います。特に【59】は要を得ており一読をお薦めします。これらをアップデートすることはどうにか実現したいと思いましたが、果たしてどうでしょうか。

第二は「テキスト（原資料）を大事にしたい」ということです。先行研究を読んで参考にすることは大事ですが、研究論文はあくまで研究対象そのものではなく、二次資料です。過度に先行研究に頼った研究は、その先行研究の亜流、あるいはバージョンアップ版にならざるをえなくなります。あくまでも研究対象であるテキストと向き合うことがオリジナルな研究をおこなううえの基本ではないかと思えます。ところが省みると、文献検索データベースや機関リポジトリ、電子ジャーナルといった現今図書館が力を入れているツールは、基本的に二次資料を探すまたは搭載するためのものです。文献探索のガイダンスでもテキストと二次資料を分けて考えてレクチャーするということが少ないように思います。これは歴史学以外の分野にも言えることですが、学生の卒論であれ、あるいはそれをサポートする私達司書であれ、改めて今一度テキストを大事にするという意識を持つべきではないかと思ったのです。（なお、蛇足ながら用語について……「辞書」「文献索引」等の通常、図書館用語で「二次資料」と言うものは【59】に従い、本稿では「工具書」と表記しました）。

第三に、私淑する中国文学者の高島俊男氏が、エッセイ『新・お言葉ですが・・・』の中にあるレファレンス事例について苦言を呈されているのを読んで共感したということがあります。

それは「水五訓」の出典を調べるというレファレンスなのですが、黒田官兵衛のことばだとして伝えられているこの訓話が、使われていることばづかいを見れば近代以降作られたものであることは一目瞭然だとして、利用者のことばを真に受けて、融通無碍に戦国期の文書

から当たろうとする図書館員の姿勢を叱咤してこう述べています。

国会図書館の参考課というのもつらいしごとだ。日ごろ文献の調査をやっているのだから、「水五訓」の本文を一目見れば、これはそんなに古いものじゃない、多分昭和の戦後、よほどさかのぼっても昭和戦前が限度だとわかるはずだ。それでも、黒田如水か王陽明か、と問われれば黒田如水関係の文献や王陽明関係の文献を入念に調査するのですね。百パーセント無駄と知りつつ。むなしいことだ。

(中略)

気の毒と言えば気の毒だが、また考えてみればズボラである。

見れば昭和のもの、それも多分戦後のものとわかるのだから、何故昭和に調査範囲をさだめて、現在あるものから、一つ一つ、過去へさかのぼってしらべないのか。出発点は架空の黒田如水なんかじゃなく現在ある「水五訓」だ。国会図書館ならできそうなものではないかと思う。

(中略)

かさねて言う。国会図書館参考課は、もしまじめに調べる気があるなら、いきなり架空の大昔にとぶのではなく、現在を出発点として、地道に過去へさかのぼって調べてもらいたい。われわれは柴田眞龍齋で行きづまってしまったが、国会図書館の調査能力をもってすれば可能なはずだ。

(Web 草思 高島俊男『新・お言葉ですが・・・』「水五訓の謎」

http://web.soshisha.com/archives/word/2007_0419.php

書籍『お言葉ですが・・・』別巻1に再掲)

このレファレンスの場合は、歴史というよりは近代のものだったのですが、テキストを大事にする、基礎知識を持つ、という精神に共感を覚えました。

よりよい司書の仕事とは、頼まれたレファレンスに対し、参考書架の工具書を片っ端からローラー作戦で当たるのではなく、各学問分野が積み重ねてきた営為の上に乗っかって、演繹的に考えるべきものなのだろうと思います。そのために歴史分野について、一助となるものを作ろうと考えたのでした。

なお、今回は筆者の勉強不足から、日本史、しかも古代～近世までの史料集の紹介にとどまりました。それ以外の日本近現代史、中国史、西洋史についてはいずれ稿をあらためることとしたいと思います。

参考文献

- 【59】西岡芳文「日本中世史 史料の手引き」『中世史研究事典』所収、1995年
- 【60】山本博文『日本史の一級史料』2006年
- 【61】山本博文「日本史の一大データバンク 東京大学史料編纂所」『江戸を楽しむ—三田村鳶魚の世界』所収、1997年
- 【62】大久保利謙、海老沢有道編『日本史学入門』1965年
- 【63】歴史科学協議会編『卒業論文を書く テーマ設定と史料の扱い方』1997年
- 【64】佐藤進一『古文書学入門』新版、2003年
- 【65】繁田信一『かぐや姫の結婚』2008年
- 【66】宮崎市定『史記を語る』岩波新書、1979年

- 【67】『大日本史料』の手引き
<http://www.toride.com/~sansui/materials/hint/hint01.html>
- 【68】金子拓「大日本史料第十編編纂ノート」
<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/kaneko/chusei/10hen.html>
- 【69】「南北朝列伝」
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~tetuya/REKISI/taiheiki/jiten/ziten.html>
- 【70】野村朋弘「中世部類記」
<http://www.toride.com/~sansui/materials/mokuji03.html>
- 【71】大阪府立中之島図書館「歴史資料集のみかた」
<http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/osaka/reksiryu.html>
- 【72】柳田俊一「太平記 現代語訳」
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~katakori/taiheiki/index.html>
- 【73】京都府ホームページ「古文書解題」
<http://www.pref.kyoto.jp/kaidai/kaidai.html>
- 【74】聚史苑「日本史研究参考基礎史料一覧」
<http://www.netlaputa.ne.jp/~kitsch/siryu/s-front.htm>
- 【75】国会図書館「リサーチナビ 県史・市町村史を探す」
http://rnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-101063.php
- 【76】長谷川端「太平記における妙吉侍者」『日本文学』31巻1号、64～70頁、1982年
- 【77】レファレンス協同データベース
事例1
<http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/detail.reference?id=1000043096>
事例2
<http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/detail.reference?id=1000039893>